

ゲイシャとムスメ

井上 章一

ゲイシャの名は、広く世界に知られている。フジヤマとならび、世界における日本イメージを、ながらくせおってきた。

それにしても、きみょうなものである。一国の文化を、山と女が代表する。あまり、ほかにこんな国はあるまい。

芸者は、おどりや音楽などで、うたげに色どりをそえる。酒の場をとりもったりすることを、仕事にしている。江戸時代のなかごろから、江戸や上方にあらわれた。

しかし、京・大阪では彼女たちのことを、あまり芸者とよばない。芸妓（芸子）というのがふつうである。これは今もそうだが、19世紀の幕末明治期も、かわらない。じっさい、1895（明治28）年の『風俗画報』第95号、「遊芸門」には、こうある。

「芸者といへば大阪では男芸者のこと芸子といへば女のことでありやす」

大阪では、太鼓持ちの男を、芸者とよんでいた。女の場合は、芸子であつたという。

だが、西洋語のゲイシャは、男をささないし、太鼓持ちを意味しない。もっぱら、女のほうをしめしている。

幕末・明治期に日本へやってきた西洋の男たちは、江戸・東京で彼女たちにしたしんだ。京・大阪にも、こなかったわけではないだろう。しかし、その機会をくらべれば、関東の宴席であそぶことのほうが多かった。

ゲイシャの名がえらばれたのは、そのせいだろう。上方になじんだ西洋人が、ゲイコの名を世界へひろめるには、いたらなかった。日本近代の国際交流が、江戸・東京を中心にしてくりひろげられたことを、思い知る。

しかし、西洋人たちが書いた19世紀の日本見聞記に、ゲイシャの図はそれほどない。キャプションにゲイシャと銘打ったものは、あんがいすくないのである。すくなくとも、フジヤマほどの数はない。

ムスメという名称で、芸者を紹介した例は、いくらかある。あるいは、宴席の場としてのせられた図に、芸者がえがかれていることも、あつた。しかし、それらがみなゲイシャの名で説明されていたわけではない。

明治初期までは、まだフジヤマとならぶほどの名声が、できていなかったのだろうか。

1896（明治29）年には、イギリスで「ゲイシャ」が上演されている。

シドニー・ジョーンズのオペレッタである。19世紀末のイギリスでは、これがかなりのヒット興行となった。ギルバートとサリバンの『ミカド』(1885年)につづく成功例があるとすれば、これだろう。

プッチーニの『マダム・バタフライ』は、1904(明治37)年が初演である。これ以後、芸者の「蝶々夫人」は、いちやく有名になった。1909(明治42)年には、あるチョウがゲイシャと名づけられたぐらいである。すなわち、クジャクチョウがイナキウス・イオ・ゲイシャに。

ゲイシャの国際化は、19世紀末、20世紀初頭からあとの現象だったのかもしれない。フジヤマに肩をならべたのも、20世紀以後のことだったのだろう。幕末・明治初期に、ゲイシャと銘打たれた図があんがいくくないのも、そのせいだと思う。

かつて、日本にはYS11とよばれた、国産のプロペラ旅客機があった。海外へも、いくらかは輸出されている。1966(昭和41)年には、ブラジルにも売りこまれた。

日本からきた飛行機だということで、ゲイシャの名をそえようと、彼地では考えたらしい。しかし、日本側は猛反対をしたという。せめて、サクラかフジヤマにしてくれ、と。

だが、ブラジル側は、なかなか納得しなかった。サクラやフジヤマなんかでは、日本のイメージがわからない。日本を印象づけるには、ゲイシャがいちばんいいと、そうあらがったのである。

けっきょく、両者の妥協点は見いだせず、YS11はニックネームなし

で運行された。しかし、このエピソードは、あなどれない。どうやら、20世紀後半には、ゲイシャの知名度がフジヤマを上まわっていた。いつのまにか、ぬきさっていたらしいのである。

ヨーロッパには、ゲイシャという銘柄のカンヅメやチョコレートが、でまわっている。ハリウッドでも、ゲイシャをとりあげた映画が、しばしばつくられる。さきほどは、山と女が日本を代表すると書いた。しかし、今はもっぱら女に、その役はまわされているのかもしれない。まあ、スシやアニメもないわけではないが。

ただ、有名なわりには、芸者のことを誤解している外国人も多いと思う。売春をなりわいとする娼婦としてうけとめているむきは、すくなくない。

もちろん、芸者も体を売ることはあった。しかし、娼婦とはちがひ、そうすぐにはなびかない。男たちを、あの手この手でじらすことも多かった。芸者あそびの男たちは、そのじれったさに、漁色の醍醐味を感じていたのである。まあ、枕芸者や不見転^{みずてん}芸者も、いなかったわけではないが。

現代のホステスにもつうじるこのあじわいは、なかなか国際化しづらいのかもしれない。